長良川の河原で「夕陽のしずく」を創り出す人

吉村伊紅美第二詩集『夕陽のしずく』に寄せて

1

一日のうちで最も美しい時刻はいつか。そんな問いを発するなら、朝焼けも美しいが、夕暮れもと私は言うだろう。正直なところ、どちらも比較できない朝焼けや夕焼けの美しい光景を思いうかべて、なぜかためらっている。この世を生きる楽しみには一日の朝夕の自然のドラマが欠かせない。吉村伊紅美さんの第二詩集『夕陽のしずく』を読んでいると、吉村さんならきっと夕暮れと言うかも知れないと感じた。吉村さんの詩作には一日にさまざまな出会いを想起し、そのすべてを引き受けて詩作しようとする衝動がある。一章冒頭の詩「夕陽のしずく」の「しずく」とは、一日の時間のエッセンスが搾り出されてくる響きがある。映像と音響と本質が凝縮してこの「夕陽のしずく」という独創的な詩句が生まれた気がする。

吉村伊紅美さんとの出会いは、二〇〇七年にコールサック社が刊行した『原爆詩一八一人集』の英語版の複数の翻訳者を探している時に、翻訳者の一人であった水崎野里子さんから英語俳句の研究者・実作者であり、優れた翻訳者であるとの推薦があり、一度は引き受けてもらえることになっていたが、大学の仕事と重なり、実現はしなかった。しかしコールサック社が刊行した『生活語詩二七六人集』や『大空襲三一〇人詩集』に参加をしてくれて「コールサック」の詩運動によき理解者となって支援してくれたのだった。『大空襲三一〇人詩集』に寄せてくれた詩「人参の花」は、京都にも空襲があった事実を記録した貴重な詩篇だ。しかし私が注目したのは、吉村さんの発語の根幹に生粋の京都人にしか分からない、京都への愛憎の入り混じった思いが色濃く背後に刻まれているのが感じられた。吉村さんはその意味で、伝統的な京都的なるものを踏まえて、現在も生み出されている新たな京都とは何かという問いを、自らに課しているように思われた。

吉村さんは学生時代に日本語の第一詩集『小さな絵』を刊行したが、日本語の詩集は長い間出版しなかった。その後に刊行した十冊の詩集や句集は全て英語で書かれている。中には英語に日本語が添えられた対訳となっているが、中心は英語だった。多くの日本の詩人たちは吉村さんの日本語の詩を読む機会はなかったのだ。なぜ吉村さんは日本語よりも英語で書くことを選んできたのだろうか。それは吉村さんが修士論文でテーマとした俳句を世界に広めたR・H・ブライスのと関わりの深さからだったと推測される。吉村さんの修士論文はその後に『R・H・ブライスの生涯 ――禅と俳句を愛して――』（同朋舎出版）として出版された。私はこの書を読んでブライスの先駆的な仕事を理解させられたし、吉村さんがブライス研究を情熱的に切り拓いていったことを知った。

吉村さんのブライス研究の一端を紹介させていただく。R・H・ブライスは、ラフカディオ・ハーンほど知られてはいないが、禅仏教と俳句を研究し日本に四十年間も定住して生涯を終えた学者である。海外の英語俳句の実作者や研究者の多くにブライスは今も影響を与え続けている。ブライスは一九二四年に二十六歳でイギリスを離れた。ロンドン大学で知り合った日本人留学生からの誘いで、日本統治時代の朝鮮の京城帝国大学で英語やラテン語を教えるためだった。ブライスは若い頃から不殺生の思想を持つ良心的兵役拒否者であり、第一次世界大戦のために軍隊の入隊義務を拒み監獄に入れられて過酷な経験をしたらしい。それが海外へ出て行く遠因になったとも推測されている。ブライスは太平洋戦争が始まる前は、金沢の第四高等学校の英語教師であったが、開戦と同時に広坂警察署に抑留される。その後は神戸の「交戦国民間人抑留所」となったホテルに収容された。その収容所でブライスは主著で芭蕉・蕪村・一茶・子規の研究書である『俳句』四巻と『禅と英文学』を書き上げた。ブライスは英国と日本の二つの国から禁固生活を体験させられた運命を持つ人物であったのだ。しかしブライスは、その過酷な運命の中でも東西の文化の基底に存在する鉱脈を掘り下げる最良の仕事を成し遂げたのだった。ブライスに禅を教え親しい間柄だった哲学者の鈴木大拙によると、ブライスは俳句についての次のような考えを持っていたという。「俳句はほんの瞬時の悟りの表現であり、そしてそのなかに事象の生命が見える。そして、瞬時かどうか判らないが、芭蕉の十七文字のなかに物の本体の意味深い直観が示されている。」吉村さんはこのブライスが直観した「俳句的瞬間」こそが後のアメリカ俳句や世界の俳句実作者に影響を与えた「俳句と禅」を一体化させた俳句観だったと指摘している。ブライスが一九六四年に六十六歳で亡くなった時に大拙は「ブライスの死によって世界は日本文化の最も卓越した解説者の一人を失った。彼の禅の研究は、俳句や日本人のユーモア感覚の研究と同様、東西の世界の相互理解に独特の貢献をしている。」と業績を讃えて、その死を悼んだ。

吉村さんが初めてブライスの名を知ったのは、ピューリッツァー賞の受賞詩人ゲイリー・スナイザーを描いたジャック・ケルヤックの小説『ダルマ・バンズ』の中で、放浪する若者の愛読書にブライスの『俳句』や『鈴木大拙全集』があったことだった。アメリカ現代詩にも影響を与え、東西文明の架け橋となっているブライスに興味を抱いたという。吉村さんはこの『俳句』について次のような感謝の思いを語っている。

私は英語俳句の創作や紹介、日本の俳句の翻訳、英語で俳

句を書く海外の詩人との交流を進めているが、ブライスの著書から多くを学ぶことができた。特に歳時記風に書かれた『俳句』四巻は、私の英語俳句創作、翻訳におけるバイブル的な存在となっている。

このように吉村さんは、異文化の交流の先駆者としてのブライスを通して日本を再発見していったのではないかと思われる。ブライスに影響を与えられた『アンクルトムの子供たち』や『アメリカの息子』を書いた黒人作家リチャード・ライトは生涯に四千句もの俳句を書いたといわれる。その代表作を吉村さんはブライスの俳句観が具現したものと高く評価している。

I am nobody
A red sinking autumn sun
Took my name away
私はもう誰でもない
秋の入り日に
私の名前をとられたから（吉村訳）
（『R・H・ブライスの生涯 ――禅と俳句を愛して――』より）

この英語俳句は五七五の十七音節に近づいており、自然との交流においても日本語と同様に表現されている。その精神性も禅精神そのもののように感じられる。アメリカの文学の代表的作家J・D・サリンジャーもブライスに関心を示していたといわれている。そんなブライスの文学論が世界に与えた研究を吉村さんはライフワークとして今も取り組んでいる。また吉村さんの新詩集『夕陽のしずく』にもきっとブライスが生かされていて、ライトと同様に「私の名前をとられた」瞬間をともに生きようとしているのだろう。

2

新詩集『夕陽のしずく』には三十一篇が収録されている。一章「夕陽のしずく」は十二篇から成っている。冒頭の詩「夕陽のしずく ――ミャンマーの友へ――」は、吉村さんがミャンマーの軍事政権の弾圧で民衆に血が流されていることを憂えて、ミャンマーで戦っているであろう友へ励ましと安否を気づかう手紙を投函するという詩だ。詩の前には俳句「曼珠沙華夕陽のしずくのみほして」を掲げている。吉村さんにとって曼珠沙華は信念を持って闘っている女性の象徴のような存在なのだろう。また後で紹介する詩「母への贈り物」にも出てくる曼珠沙華は、吉村さんが最も美しいと子供心に感じた花だったのだ。

夕陽のしずく――ミャンマーの友へ――

曼珠沙華夕陽のしずくのみほして

ある日とつぜん
曼珠沙華が
燃える炎を吹きあげるように咲くとき
軍事政権への抗議は
灼熱の太陽をのみこんだ炎となって
友の住む国の隅々に
広がって行った

抗議デモに加わった僧侶に　若者に
銃弾が炸裂した
大地は若者の血を吸うヒルとなり
空は母の嗚咽を汲みあげ
雨期はいつになく長く続いた

受取人不明で戻ってくるかもしれない手紙を
友に投函するとき
曼珠沙華の赤い華は土の中に消えていた
ピラカンサスの木に潜り込んで
山鳥が赤い実を啄んでいる

今日も胸に浮かぶ風のように舞う友の姿
長い髪を独特の髪型に高く結いあげ
金色の櫛を挿し
ロンジーの裾さばきも軽やかに踊る水鳥の舞
岸辺の花とせせらぎが囁き合うミャンマーの舞踏
友は赤い実を口に含んでほほ笑む

ある日とつぜん
曼珠沙華が夕陽の一滴をのみこんではじけるとき
友からの便りを口にしたあの山鳥が戻って来ると
わたしは待っている

「夕陽のしずく」は民主化を求めるミャンマーの友の叫びであり、ミャンマー民衆の自由を求める精神の象徴のように語られている。「夕陽のしずく」は曼珠沙華の赤となり、またピラカンサスの赤い実に宿る。たとえ友から手紙の返信が来なくとも、赤い実を口に含んでミャンマーの踊りを舞う友は、決して屈することはない。友からの返信のように山鳥が「夕陽のしずく」を宿した赤い実を口にして戻ってくるのを「わたしは待っている」のだ。吉村さんはたぶん英語俳句のネットワークによって世界中に友がいるのだろう。その中のミャンマーの友への讃歌がこの詩に結実している。吉村さんの詩は、その意味でスケールが大きいテーマを抱えているが、自

らの感受性の最も大事な視点から自由を求める一人の民衆の姿を表現しようと試みている。世界に開かれている詩とは、このような試みが大切だと思われるし、俳句と詩のコラボレーションが絶妙に響き合っている。一章の他の詩篇には、動植物からの視線によって成り立っている独特な詩篇が集まっている。「船出」のカラス、「サンザシ」、「こうもり」、「石仏」、「マジシャン」、「一角獣」、「カイロウドウケツ」、「サルの眼」、「猫の地図」、「ひばり」、「黒い瞳の人形に贈る花もなく」などからの人間を相対化してしまう不思議な視線によって詩が成り立っている。

3

第二章「黒砂糖の香り」十篇は、吉村さんの感受性の源泉であり、故郷である京都について書かれた詩篇だ。冒頭の詩「黒砂糖の香り」は母への感謝を記したものだ。

黒砂糖の香り

母の日や寝姿までも母譲り

お菓子屋さんの棚に
黒砂糖のキャンディを見つけると
わたしはついつい買ってしまいます

黒砂糖はあのとき
まるで宝物でした
お母さんは
お弁当箱いっぱいの黒砂糖を
手に入れたあの日のことを
覚えていますか

遠くの親戚まで
長い道のりを歩き
お母さんは
自分の結婚式の着物と交換に
黒砂糖を手に入れてくれましたね
三歳になったばかりの
わたしのために

わたしたちは手をつなぎ
たんぽぽの原っぱをぬけ
何時間も歩きましたね
原っぱは夕陽に照らされて明るく輝き
わたしは甘い黒砂糖の香りで
夢心地でした
お母さんは何も話さず

ただひたすら
わたしの手を強く握って歩きましたね

今は家の中でしか歩くことのできないお母さん
今も一九四七年のあの春の光を
覚えていますか

母が自分の花嫁衣裳と引き替えた黒砂糖を二人で抱えて、タンポポの咲く野原を歩いていく思い出は、とても清々しい輝かしい光景だ。母のこの行為は、きっと吉村さんをいつも勇気づけてきたのではないか。戦後間もない貧しい時代であったが、精神的には子供を育てる親たちが子に注いだ愛情は深いものがあった。黒砂糖を見ると宝物のように感じる吉村さんの思いは、黒砂糖を通して三歳の娘を祝福しようとした母の愛情を感じさせてくれる。真に物を生かすというのは、このようなことだろう。今私たちは、物を生かすのではなく物の力を殺いでしまっているのかも知れないと感じさせてくれる詩だ。吉村さんは心に大事にしまっている戦後間もない光景を次の時代へ普遍的に語ろうとしているのだ。

母のことだけでなく、父や父の友人たちのことも吉村さんは詩「映画館の詩人」、「ハバハバ」、「編み上げ靴」などで記しているが、それらの詩には占領下のアメリカ文化が溢れてくる戦後社会の貴重な証言が記されている。吉村さんの父は映画館に吉村さんをよく連れて行ったそうで、映画の始まる前には初老の詩人たちが自作詩を朗読するのが常だったそうだ。今では想像もできないことが京都の映画館では毎日繰り返されていた。吉村さんが初めて出会った詩人たちは「映画館の詩人」だったのだ。吉村さんは父母の溢れるくらいの愛情に育てられたことを素直に感謝している。しかし「父のトラウマ」では、酒を飲みすぎると引き起こされる父の家庭内暴力について触れている。慎み深い人間であるが豹変してしまうことの原因が「戦争のトラウマ」から来ていることを知り、吉村さんは「父へのトラウマ」が消えていったという。吉村さんは父の暴力の後遺症で今も残る左耳の聴力が弱いことを誰にもいえないでしまい込んでいた。しかし詩「父のトラウマ」で吉村さんは、父の世代の戦争体験の悲劇が戦後社会においても家族の中に暗い影を落としていたことを書き記そうとしたのだろう。それをまた吉村さんは風化させないで記録すべきだと考えているのだ。

二章の最後の詩「母への贈り物」も吉村さんの感受性が際立っていて素敵な詩だ。吉村さんは五、六歳の頃の母の日に咲いていた曼珠沙華がとても美しいと感じて、それを手にいっぱい持って意気揚々とプレゼントしたそうだ。すると母は「その花は毒なんえ　はよ　ほかしてきて」と叱りつけたそうだ。吉村さんの中で母と自分の感性の違いを発見した瞬間だったのだろう。それから長い時間がたち、今度の母の日には曼珠

沙華をイメージしたベッドカバーを送るので、「受け取ってね」という言葉で詩を締めくくっている。吉村さんはたとえ親子であっても違いを尊重しながら、自分の感性を大事にして生きることの意味を感動的に表現している。

4

三章「川からの贈り物」九篇は、海外で出会った人々や現地の草木などに魅せられた詩篇や、現在住んでいる岐阜県の長良川近くでの暮らしについて書かれた詩篇だ。最後の詩「川からの贈り物」には何のてらいもない吉村さんの日常が描かれている。環境破壊に不感症になってしまった現代では、このような暮らしは奇跡のようにも感じられてくる。しかしこのように自分の身近な自然に畏敬する心を持ち、その恵みを発見し暮らしに役立てることが今最も必要なことなのかも知れない。小さな奇跡のような行為を積み重ねていくことが、生きることが、試されていることの意味なのだろう。

川からの贈り物

真っ赤に色づいたクコ酒
三年前に仕込んだものだ
長良川の河原で
冬の寒風に吹かれながら

夫と二人
ちいさなナス科の赤い実を
ビニール袋いっぱいに収穫した

氷砂糖と焼酎に赤いクコの実を漬けて
収穫場所と年度と日付を記した紙を貼って
みんなの集まる食卓の窓際に置く

だんだん赤くなるね
どのように飲むの
おいしいの

クコ酒のほかにも
薄紅色のサクランボ酒
黄色いスミレ酒
琥珀色のカリン酒
紅色のスモモ酒
赤いベルベットのヤマモモ酒が並ぶ

おいしいよ
長良川で収穫したクコ酒を
みんなと一緒に
食前酒で

飲むのが
最高においしいよ

明日はシカゴから
友だちがやってくる
クコ酒と詩の朗読と
長良川の川風と

抱擁の中で
わたしのささやかな祝宴が
はじまる

クコは川の土手などの水辺に紫色の小さな花を咲かせ、グミに似た橙紅色の実をつける。このクコをを風味にした酒があると私は知らなかった。この詩を読んでいると詩や俳句が「クコ酒」のように手作りされるべきであると思われてくる。その土地から毎年生まれてくる恵みであり、その土地のエッセンスを搾り出したものを親しい友人たちに振舞うことが最も贅沢であることを語っている。「クコ酒と詩の朗読と／長良川の川風と」が最も祝宴に必要なものなのだ。吉村さんにとって橙紅色の実からできるクコ酒は、きっと「夕陽のしずく」そのものを創り出すことなのだろう。

吉村さんの詩作の試みはまだこの長良川のほとりから継続されるだろう。吉村さんの今までのブライス研究を含めた詩的な足跡を辿ることは、日本の詩や俳句が世界とどのような観点で交流していったらいいか、多くの示唆を与えてくれるだろう。そんな詩集『夕陽のしずく』を多くの人たちに読むだけでなく、心の中に飲み干して欲しいと願っている。

最後に私の好きな吉村さんの英語俳句をひとつ紹介してこの小論を終えたい。吉村さんは京都の仕舞屋（しもたや）や町家（まちや）に暮らす心情を静かに詠いあげている。

doves cooing
through the bamboo shade
wake me up
よしず越しに
鳩くぐもりて
私を起こす